



吉見町長 神田 隆氏

町長のメッセージ

埼玉県ほぼ中央に位置し、東は雄大な荒川の流れてによって形づくられた実り豊かな穀倉地帯、西は奥武蔵の山地から緩やかに延びた緑あふれる比企丘陵という緑豊かな町です。また、国指定史跡「吉見百穴」をはじめ、松山城跡や吉見観音の名で親しまれている安楽寺など、貴重な文化財が数多く残された歴史の宝庫でもあります。産業交流拠点である「道の駅いちごの里よしみ」では、地域資源をいかした商品の生産、販売が進められ、隣接する農産物直売所は連日多くの方で、賑わいを見せています。「歴史・自然・人々のふれあい」これが吉見町の魅力です。

町では、「未来へつなぐ みんなで安心して暮らせるまち よしみ」を将来像に掲げ、町民と行政が一体となり、住む人みんなの笑顔あふれる活力あるまちづくりを進めています。

はじめに

吉見町は、埼玉県のほぼ中央、関東平野の西部に位置する。町を包み込むように、北東側を荒川、南西側を市野川が流れている。江戸時代初期（1620年頃）には、地域をぐるりと囲む高さ約3mの輪中堤防「吉見領^{いづみ}堤防」が築かれた。町にある「さくら堤公園」は、この堤防の一部を整備したもので、今でも江戸期の堤防の痕跡が現地に残る。ここは県内の桜の名所のひとつに数えられ、1.8kmにわたる見事な桜並木が続く。早春には、菜の花が辺りを覆いつくし、春色のコントラストが公園を包む。他にも、町には古くからの史跡も多く残る。古墳時代末期の横穴墓群「吉見^{ひやく}百穴^{あな}」は有名だ（表紙写真）。湖沼や田園地帯も多く、歴史ある文化と豊かな自然、四季折々の彩りに満ちた穏やかな風景が町には広がっている。

山々より流れる荒川水系の河川により土地が肥沃で、豊かな土壌を活かしたイチゴ栽培が盛んである。東京など大消費地への好立地を活かし、町は県内有数のイチゴの産地となった。1950年代に栽培が始まったとされる吉見町のイチゴは、「味」と「品質」が評判を呼び、今では収穫シーズンの直売所は大行列になる。1月から5月まで楽しめるイチゴ狩りは、県内外から多くの観光客が訪れる。2013年に町民からの公募による「吉見いちご」を使用した町のお土産スイーツの開発が本格化。産業交流拠点「道の駅いちごの里よしみ」によりブランド化が一層進められ、今では町の魅力を象徴する特産品となっている。

町の持続的発展につなげる道路拡張

町の中央には、隣接する市を結ぶ主要地方道東松山鴻巣線が東西に走る。町と鴻巣市の境にある荒川を横断する道路であり、間にある荒川の川幅は2,537m。「川幅日本一」の標柱が立つ、県内でもよく知られた道だ。全長約11kmの同路線は、東松山市から吉見町を経て鴻巣市へ至る、東西方向の交通の要所となっている。現在、町は県と連携して東松山鴻巣線の完全4車線化を進めている。約30年前から進められてきた大規模事業で、地域の課題である交通渋滞の解消と将来の交通量増加への対応が目的だ。整備が進むことで、上尾道路や国道254号バイパスなど北関東へとつながる主要幹線道路と一体的につながり、関越道東松山ICへのアクセスも向上する。事業は着々と進んでおり、町内の沿道地域の生活環境の向上や、産業経済の発展の期待を背負う。町は広域的な交流と連携の促進、社会経済活動の持続的な発展を見据えている。



4車線化が進む町中央の主要地方道東松山鴻巣線

吉見町概要

町の木 けやき 町の花 きく 町の鳥 ひばり

人口(2026年4月1日現在)	17,232人
世帯数(2026年4月1日現在)	7,956世帯
平均年齢(2026年1月1日現在)	54.0歳
面積	38.64km ²
製造業事業所数	62所
製造品出荷額等	1,387.5億円
卸・小売業事業所数	93店
商品販売額	83.3億円
農業産出額	15.2億円
一人当たり都市公園面積	126.22m ²

資料:経済産業省「経済構造実態調査」ほか



主な交通機関

- 関越自動車道 東松山ICから町役場まで約7km
- 圏央道 川島ICから町役場まで約8km

未来を見据えた産業拠点の開発

道路拡張に合わせ、吉見町は埼玉県企業局と連携し、新たな産業拠点づくりを進めている。昨年着工した「吉見大和田地区産業団地」は、拡張中の東松山鴻巣線沿道、荒川河川敷に近い町の「玄関口」に位置し、約17.2haの広大な工業用地を整備する計画だ。企業立地と一体的に工業用地の造成を進めることで、町内の工業・物流業のさらなる発展を図る。ここは、町中央の下細谷地区、北西側のながやつ工業団地、西側の城南産業団地に続く4つ目の産業拠点で、いずれも東松山鴻巣線とのアクセスが良好だ。既存の団地は拡張するなど、企業からのニーズの高さがうかがえる。

吉見町は北関東の高速道路網と首都圏の大消費地の境に位置する。交通インフラの向上も今後見込まれるなか、すでに製造・物流・食品加工など多様な企業が集まり、地域産業と雇用を支えている。持続可能なまちづくりに向け、町では未来を見据えたさらなる取り組みが進んでいる。



町の新たな産業拠点「吉見大和田地区産業団地」の整備区間

未来に向けたまち振興計画の後期期間が開始

こうした取り組みが進むなか、吉見町では本年4月から、まちづくりの基本計画である「第六次総合振興計画」の後期期間が始まった。将来像「未来へつなぐみんなで安心して暮らせるまち よしみ」を掲げ、「20年先への種まき」の想いを込める。10年間の計画の中で、町はさらに10年後からスタートするまちづくりも見据えて、子どもや孫たちの未来に向けた基盤づくりを進めていく。

交通基盤の強化は、町の将来像を支える大きな柱だ。東松山鴻巣線の4車線化により、広域交通ネットワークとの結節点としての役割が高まる。物流効率の向上や企業立地の促進が期待される。整備が進む吉見大和田地区産業団地も、地域経済の活性化と雇用創出に寄与する見通しだ。

一方で、吉見百穴やさくら堤公園に象徴される歴史・文化・自然環境を次世代へ継承することも重要となる。景観資源を守りながら観光振興や交流人口の拡大を図る取り組みも進める。町は、道路を軸にした「未来地図」を描いている。用途別の土地利用に町民の生活や想いを重ね合わせ、様々なライフステージに寄り添うまちづくりを目指している。

歴史と自然に育まれた穏やかな町並みに、交通・産業基盤の強化という新たな動きが重なる吉見町は、“暮らしやすさ”と“発展性”を備えた地域として、未来へ向けた次のステージに歩みを始めている。

(齋藤康生)